

2011年3月11日。あの日から12年経ちます。

このくらいの年月が経つと、高校生でも当時は就学時未満ですから12年前の記憶は朧気です。小学生だと震災後生まれがほとんどになりますので、現実にあった出来事だと実感するのは難しいことだと思います。

2022年4月から、私は大槌高校に異動となりました。大槌高校では『復興研究会』という活動があり、私もそれに関わらせていただいております。復興研究会では年に3回の定点観測（町内の約180地点を同じ場所・アングルで撮影する活動）を10年続けています。学校関係者だけではなく、町役場をはじめ町内の方々の協力もあつての活動です。その活動で私も生徒と一緒に町中を歩きます。町内での被災場所は嵩上げ工事後に建物が建てられているので、新しい道路や建物が多く見受けられます。

私は沿岸生まれですが、大槌町内をきちんと歩くのは初めてだったので、歩きながらの感想として「きれいに整備されているね」とこぼしたところ、一緒に歩いていた3年生の生徒に「違うよ先生。やっとここまで来たんだよ」と言われました。忘れられない一言です。ああこの子たちはこの町の復興過程をずっと見て・感じてきたのだ、と実感した瞬間でした。この活動のときは、生徒の方が私の先生です。前はこうだった、こういう場所だったということも教えてもらっています。

同じ箇所で写真を撮るといふ、内容としては単純な活動ですが、写真を見比べるとどのように変化してきたかが分かります。嵩上げ工事でどのくらい高くなったか等、話で聞いているだけでは実感がわきませんが、写真があると分かりやすくなります。10年続いたこの活動が評価されて、令和4年度は内閣総理大臣表彰もいただきました。どうしても今を生きる私たちは過去に目を向ける機会が減りがちですが、写真を目にすることで思い出すことや感じることができます。復興研究会の活動も「復興を！」という視点から、風化させないよう「伝えていく」にシフトしています。

内陸部から沿岸部にきたことで、震災や復興を感じる機会は増えました。しかし、年々生徒たちの記憶も朧気になる中、どのように震災を風化させずに伝えていくかが難しいところだとも実感しています。まずは一人一人が考えていかなければならないことです。そして、次に来るかもしれない何かの事態に備えて、何が必要か、準備は大丈夫かを時々確認しなくてはならないだろうとも思います。あの日の教訓から得られる情報、そして今後の災害想定から考えられる準備は何か、少しでもいいのでじっくり考える時間も必要だろうと思います。もちろん、備えるための準備は一人ではできません。例えば保健室ではどのようなものが必要かは養護教諭同士の情報交換が欲しいところですし、校内での共有も必要です。一人で出来ることには限りがあります。周りの手を借りつつ、いざという時のために備えていってほしいと思います。

いざというとき動けるよう、養護教諭の皆様には休息をしっかりとっていただき、心身共に元気な状態でこれからを過ごしていただければと思います。感染症対策等で忙しい中とは思いますが、少しでも穏やかに過ごしていけることを願っております。

多くの失われた命のご冥福をお祈りし、3月11日に寄せての挨拶といたします。

令和3・4年度 岩手県学校保健会養護教諭部会会長 村上百合子

写真提供：大槌高校復興研究会



①城山からの展望



②赤浜小学校



③大槌町文化交流センター



④吉里吉里海岸